

# 水産や芸術文化にも目を向けて 「原子力マネー」に頼らない町へ

■岩内町で「地域振興プラン」を考える公開シンポジウム

9月11日、「どうする原発に頼らないまちづくり」をテーマに、岩内町内で公開シンポジウムが開かれた。地元・周辺町村を中心に百人余りが参加。「原子力マネー」に依存しない地域振興の道を探った。

泊原発はいずれ廃炉を迎える。今から「原発に頼らないまちづくり」を考える場が必要ではないか——という問題意識から「後志・原発とエネルギーを考える会」が企画し、3年ぶ



後志管内や札幌圏などから100人余りが参加したシンポジウム

り4回目の開催となった。

パネルは、地元事情を通じ、町づくりに一定の見解を持つ人に依頼しており、今回は「子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会」会員で元寿都町職員の大串伸吾さん、岩内美術振興協議会理事長の滝澤澤さん、俱知安町内で宿泊施設を営んだ藤井俊宏さんが登壇した。

経過報告に立った「泊原発立地4町村住民連絡会」代表の佐藤英行さん(岩内町議)は、泊村の知人にパネルを依頼した際、「原発の防潮堤工事などで、あと10年間は土建会社の思うまま。それまで(発言を)我慢しよう」と固辞された話を紹介。「立地4町村の総合計画には、原発についての記述がほとんどない。福島への教訓に触れず、交付金をもらう形で町村財政が動く。寿都町や島牧村では(核)ゴミ最終処分地選定のための概要調査を阻み、新たな町づくりをし

てほしい」と訴えた。

サクラマスの研究で北海道の土を踏んだ、新潟出身の大串さんは寿都町役場で水産の仕事を担当した。寿都では、漁協組合員は減ったが

漁獲高は維持され、経営規模も拡大している。大串さんは、地域づくりで熱心な自治体を調べる中で、日本海に浮かぶ隠岐諸島の島根県海士町に注目したという。

同町は人口約2300、本土から船で3時間ほどの離島。存続の危機に瀕する高校を守るために「島留学」のシステムを創った。

「民間のキーパーソンが島全体をキャンパスとして捉え、(島留学で)16年には生徒数は180人に増えた。早い時期から地域おこし協力隊のモデルになる活動もやっています。卒業で年間50億円のお金が町外に流出している実態を調べ、新たな企業を創って事業を進めている。その結果、人口減少が抑えられたのです」

大串さんは町内唯一の温泉「ゆべつのゆ」でトラフグを養殖し、「大切な人に『寿の都から』しゅくふくを贈ります」のキャッチコピーで売込むアイデアも紹介した。

木田金次郎美術館の建設や運営に

も携わってきた滝澤さんは、岩内では唯一、原発反対派と北電職員が常連のバーのマスター。「どちらの立場でもニュートラルに話せる環境を創りたかった」

岩内では昔から生活の中に美術が入り、木田金次郎の絵画活動が成り立つ素地になったという。「今も48の店のウインドウに町民の絵を展示してくれる。絵画教室に通う人も多く、美術活動が根づいています(滝澤さん)。文化・芸術面からの町づくりの大切さを強調していた。

旅行者を受け入れた経験を持つ藤井さんは、岩内の町を見て歩いた様子をお金を出さない取り組みを進めていくことを提案した。

「全国に残る『市』は地元の人たちが訪れ、地域の付加価値を高められる場所。岩内には多くの老舗が残り、可能性がある。プレジャーボートの係留所にも余裕があり、人を呼び込めるのではないか(藤井さん)」

こうした提案も採り入れながら、4町村住民連絡会は「原子力マネーに頼らない地域振興プラン」の中間報告を年内に公表する予定だ。

(ルポライター・滝川康治)